

岩中一家

私の兄弟四人はいずれも岩中、岩高と在学した岩中一家だった。子だくさんの当時でも珍しい例だったろうし、少産少子の現在では望むべくもない。六歳上の陵二（東北大名誉教授、現石巻専修大教授）は体操部で活躍したが、次兄隆も体操部に、私と弟克夫も一時期、同部員だった。私たちには他校への進学

小林 泰宏（新9回生）

や他部への入部は念頭になかった。私は岩中入学するや憧れの体操部にはいった。高三の応援団は夜叉の群れのように、新入生を震え上がらせる上級生だったが、体操部は教え上手の愉快的部員ばかりで、先輩面で威張る人はおらず、すんなりと新しい人間関係にとけこめた。

当時全国トップレベルの活躍をしていた上級生にまじっての練習は素晴らしい体験だった。早速、運動会でその成果を披露したり、部員で姫神登山し、その中腹の原っぱで体操したり、夏には種差海岸へ遠征等々、毎日が楽しく充実した一年半の部活だった。

中二の冬、私は股関節が化膿する大病を患った。輸血が必要になったとき、体操部員が連日献血に駆けつけてくれ一命をとりとめた。後遺症のため失意のうちに退部したが、私の体には多くの先輩たちの血が流れていた。私は医学の道へ進もうと決意した。

六ヶ月間も休学したが、留年することも、高校受験でせわしくなることもなく、じつくりと自分の将来を考え実践できたのは、私学で中高一貫教育のおかげだった。私は高卒後二〇年間、他県に暮らしていたが、父の逝去をきっかけに昭和五四年、ふるさと盛岡に隣接している都南村にちっほけな医院を開業した。その前年、矢巾町の齋藤医院を突然訪ね齋藤院長に私の開業について相談した。院長は岩中高の三年先輩で同じ体操部だった。それ以来の再会だったが、私をおぼえており親身になって相談にのってくれた。

齋藤先輩でもいだすのは、私が中一年時の予餞会だ。高一の齋藤先輩が黒人に扮したアル・ジョルソンを演じ、舞台を跳ね回って「スワニー」を熱唱した。高二年の田村（東大理三医学部に現役入学）と秋浜（大阪芸術大）による「ベニスの商人」も圧巻だった。英語劇だったが、秋浜演じるシャイロックは妖気が漂う凄味があった。次から次へとくりだされる上級生の、男臭い演物に圧倒された。最前列に座らされている最下級生の私たちは素晴らしい先輩をもった喜びと誇りで、俺たちも頑張らなきゃと語り合ったのおぼえている。数年前、書店でビデオ『ジョルソン物語』をみつけ、尊敬する齋藤先輩に進呈したが、



一瞬童顔に戻り、さまざまな思いが脳裏をかすめたようだった。

私は新九回生で、昭和二六年に岩中に入學、三二年に岩高を卒業した。高二の時、野球部が甲子園出場を成し遂げ、同期生ではピッチャー村川をはじめ、沢野、佐々木が活躍した。卒業後、「九桜会」と称する同期会を行っているが、同窓生には今でも『甲子園同期の某』と自己紹介したほうが通りがよい。夢の甲子園への道を開いた快挙は、石桜会七〇年史のなかでも最大の華だろう。地方予選の一回戦目から予想は常に劣勢だった。ごく平凡な選手たちのチームが、試合の度ごとに予想を覆

しながら一歩また一歩と、夢の実現に向かう様は全校生に熱い感動と連帯感を与えた。

昨年、私の岩高卒業アルバムが、四〇年ぶりに父の遺品の中からみつかった。その編集後記につきのような文章があった。

『ここに集いし一三〇の若人、喜びあり、悲しみあり、人それぞれの生き方があるが、社会の一線にたつときも、あるいは人生の半終え皺よる顔に老眼鏡の光る時も、どうかこの冊子をひもとくことを忘れないでください。時々でよいから——。』ああ、俺にもこんな時代があったのか』と忘却の彼方を探り求め、旧き友の面影、盛岡の北に存した母校を思い出して下さい。——』

この文を草した編集長の角掛はクラスで私の隣席だった。角掛は弁論部だったが、社会科の授業で、日野岳先生になら難しいテーマで論争を挑み、しばし激しくやりあった末、コテンパンにやりこめられてしまった。突然『悔しい！』と絶叫し机上に泣き伏した。その激情家も今は亡い。企業戦士として異郷で、いつの日か盛岡に帰りたいと念じていたという。同期一三二人中、二四名もの多くがすでに鬼籍に入っている。

岩中高に学んだ喜びと誇りと思いを語り合うことも叶わなくなった。